

教育上の課題と工夫

2022 年度において、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により最も影響を受けたのは、博士論文や修士論文、課題研究報告書などの学位論文執筆に取り組むための、研究データの収集であったように思う。研究データは、医療施設等において、患者やその家族、あるいは、看護職を対象とした参与観察やインタビューにより収集されるものであったが、感染拡大により医療施設等に入ることや対象者との接触が制限され、研究データを収集できない状況が起きた。そして、研究データが収集できないことにより、分析や論文執筆に取り掛かる時期も大幅に遅れることになった。また、医療現場に身を置きながら学位論文作成に取り組んだ者は、従来よりも過重な労働の中での研究活動となり、その苦労は想像を絶するものであったと思う。そこで、論文の質を保ちつつも、定められた期限内に論文を完成できるよう、研究科教務委員会と研究指導教員とで話し合い、研究指導教員はオンラインでのインタビューの実施を院生にすすめたり、少ない対象者数であっても深みのあるデータを収集できるよう、濃密な語りを得るための問いかけ方法を院生と模索したりと、データを収集する工夫を共に考えた。研究科教務委員会は、論文の初稿の提出期限を 3 週間程度延期する決定をした。このような組織的、そして、研究指導教員の個別の対応が行われ、院生の血のにじむような努力により、修士論文 2 本、課題研究 3 本、博士論文 1 本と例年に遜色ない学位を授与し、修了生を医療および看護教育現場へ輩出できた。

学位論文の執筆以外については、これまで大学院は、島嶼地域に在住する院生のためにオンラインで授業を行ってきたが、そのオンライン授業が島嶼地域に在住する院生以外にも拡大され、すっかり定着したことも新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響といえるだろう。

新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行し、また、感染拡大も収束に向かいつつある 2023 年は、研究データの収集が困難な状況は起きていない。授業は、授業効果を勘案し、また、院生の要望に応じて、対面とオンラインを使い分け、実施している。

コロナ禍の教育活動を振り返って

今回、学位論文の質を保ちつつ、期限内に論文を完成させることや授業を継続することは、教育活動における最大のミッションであった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大という危機的な状況下での教育活動において、研究科教務委員会という組織と研究指導教員という個別の双方で、状況に応じて柔軟に対応したことにより、このような教育活動のミッションが達成できたのではないか。この経験から得た学びを今後の教育活動に活かしたい。
